

概念メタファーによるシティズンシップ教育の方法の検討
中村（新井）清二（大東文化大学）

民主主義社会の担い手たる民主的市民の育成を目的とするシティズンシップ教育が盛んに論じられている。その理由には、国民国家の境界線の不明瞭化、それに伴うメンバーシップの流動化等々、近年の特徴が挙げられるものの、基本的なこととしていえば、民主主義社会は、民主主義のあり方の擁護と発展を担う民主的市民にその存続がかかっており、それ故、教育とりわけ学校教育に対して民主的市民のアイデンティティ形成が期待されてきたからである。

しかし、こんにちの学校は、子ども達の生活の一部でしかなく、また、特定のアイデンティティ形成が（暗黙のうちに）期待される場所であり、マイノリティの子ども達にとってはそのアイデンティティが強く異議にさらされる場所でもある。このような場所において、民主的市民のアイデンティティ形成の可能性はどれほどあるのだろうか。

先行研究においては、多様性をふまえた民主的市民のアイデンティティ形成を中心にシティズンシップ教育の構想を検討した研究があるものの、具体的な教育方法の提示としては、十分とは言えない状況にある。

たとえば、シャンタル・ムフの闘技民主主義論を検討し、ムフがウィトゲンシュタインの議論を援用しながら、民主的価値への同一化は日常的なコミュニケーション実践（生活形式における一致）において生起する、と主張していることに注目したものがある（中村（新井）2013）。

この研究の特徴は、民主主義の教育を、認知的なレベルでは不可能だとする研究（Biesta 2011）とは対照的に、「ことば」をもちいる認知的な水準に設定する点にある。しかし、民主的市民のアイデンティティの強化（consolidation）がコミュニケーション実践に支えられているとしても、実際のところ、どのようなコミュニケーション実践がそれに寄与するのか、依然として明らかではない。

そこで本発表では、シティズンシップ教育において、民主的市民のアイデンティティ形成がどのようなコミュニケーション実践によって進められるのか、を探究したい。その際に手がかりにするのは、フィッシュマン&ハースの研究（Fischman and Haas 2012）である。彼らの研究は、民主的市民のアイデンティティ形成に寄与するものとして、ジョージ・レイコフ（George Lakoff）らの認知言語学における「概念メタファー」に注目するものである。

文献

中村（新井）清二 2013、「闘技的な公共圏を基礎にした民主的集団形成の方法について」『生活指導研究 No.30』、日本生活指導学会

Biesta, Gert, J.J., 2011, Learning Democracy in School and Society : Education, Lifelong Learning, and the Politics of Citizenship. (ガート・ビースタ著『民主主義を学習する』勁草書房、2014)

Fischman, Gustavo E. and Haas, Eric, 2012, “Beyond Idealized Citizenship Education: Embodied Cognition, Metaphors, and Democracy” in Review of Research in Education.